

研修報告書 No.21

今回、私は高知県で地域医療研修を行う貴重な機会を得た。私は県外在住であり、普段は都市部の医療機関での学びが中心であるため、地域医療の現場を直接体験することは非常に新鮮であり、同時に多くの学びを得ることができた。

まず、県外在住の医師として感じた高知の地域医療の状況について述べたい。研修を行った病院は山間部に位置しており、いわゆる「へき地医療」の一端を担っている。都市部の大規模病院に比べると、検査や治療の選択肢は限られるが、その一方で「ここに病院があること自体が地域の人々にとって大きな安心につながっている」という事実を肌で感じた。大きな病院へは距離的にも経済的にも簡単に通院できない患者さんが多く存在し、そのような方々にとって病院が果たしている役割は極めて大きい。医療の均てん化が叫ばれてきた中で、都市と地方の格差を身をもって実感すると同時に、その格差を埋める努力が地域医療の本質であると強く感じた。

次に、今回経験した研修内容について述べる。私は普段あまり接する機会のない診療科や業務を幅広く学ぶことができた。特に印象に残ったのは、診療放射線技師の方々の仕事である。診断に欠かせない画像検査を担いながら、限られた機器を最大限活用し、迅速かつ精緻に診断に貢献している姿を間近に見ることができた。

また、透析医療にも触れ、患者さんが生活を続けていく上で透析がいかに欠かせない存在であるかを実感した。さらに訪問診療に同行させていただいたことでは、病院に来られない患者さんの生活環境を理解し、その中で医療を提供することの難しさと大切さを学んだ。医療者が患者さんの生活に入り込んで支援することが、単なる病気の治療にとどまらず、生活全体を支える行為であることを痛感した。

また、先生方の患者さんへの向き合い方も大きな学びであった。先生方は、患者さん一人ひとりに寄り添い、丁寧な説明を行いながら診療を進めていた。『限られた医療資源の中でも「患者さんが安心できるようにする」という姿勢を決して忘れない』、その姿勢は都市部の病院以上に強く感じられ、地域に根ざした医療の本質を示しているように思えた。

最後に、この臨床研修で私が得られたと考えるものについて述べたい。最大の学びは「医療の多様性」を理解できたことである。都市部では当たり前に行える検査や治療が、地域の病院ではすぐに実現できないことがある。

しかし、その制約の中で医療者は工夫を重ね、患者さんにとって最善の医療を模索している。その過程を間近で体験できたことは、今後医師を目指すうえで大きな財産となる。また、診療放射線技師をはじめとする医療スタッフの働きや、訪問診療の現場での学びは、チーム医療の重要性を再認識させてくれた。地域医療は単に「都市部より不便な医療」ではなく、「患者さんの生活により密接に寄り添う医療」であることを実感できたことは、今後の進路

を考える上で大きな指針となる。

今回の研修は、都市部に住む私にとって、普段触れることのできない地域医療の最前線を知るかけがえのない機会であった。今後どのような場所で医療に従事するにせよ、この経験を基盤に「患者さんに寄り添う医療」を実践していきたいと強く思っている。